

一六世紀初頭のヘラート

—二つの新興王朝の支配—

久保 一之

【要約】 一六世紀初頭の激動期、東方イスラーム世界最大級の都市ヘラートは、相次いでシャイバーン朝とサファヴィー朝の支配を受けた。この二つの王朝は、創設期において類似する国家構造を維持していたと思われるが、(一)各々の支配開始時の情況と(二)その前後を通じてのヘラートの主要な有力者達の動向、を考察することによって、両者の違いは明瞭となる。前者は大都市ヘラートの富を吸収することに専心して住民を圧迫するが、後者は、宗教上の問題を投げ掛ける一方、ヘラートの主要な有力者達の地位や動向に大きな影響を及ぼした。この事態に関わるサファヴィー朝内部の人々は多様であり、共通する方針は見出し難い。シャイバーン朝とサファヴィー朝に共通して指摘されることは、定住民社会の出身で宮廷内に地位を得た文官達の権限が看過できないということである。

史林 七一巻一号 一九八八年一月

はじめに

一六世紀初頭、イスラーム世界は激動の時代を迎えた。東方では、遊牧ウズベク族のシャイバーン朝(一五〇〇—一五九〇)とシリア派教団から起ったサファヴィー朝(一五〇一—一七二二)が新たな局面を現出した。この二つの王朝は、一五一〇年メルヴ近郊で会戦し、翌一五一一年にはアム河を国境と定める。以後、シャイバーン朝軍がサファヴィー朝の東方の領土を頻繁に侵攻するが、安定した政権を確立するには至らなかった。そして、ウズベク族は一九世紀後半までマー・ワラーン・ナフルを支配して民族社会を形成し、イランではサファヴィー朝時代に二ニイマーム派シリア主義が浸透してい

った。

各々ウズベク族とトルコマン系諸部族^①の軍事力を背景に勃興したシャイバーン朝とサファヴィー朝の、創設期における大まかな国家構造は、支配・被支配の関係による「トルコ系遊牧軍事集団」と土着定住民の結合であり、この点に限って言えば、一六世紀初頭に滅亡したティムール朝やアク・コムンル朝と同様である。しかし、我々が知っているのは不明瞭な支配体制に過ぎず、定住民支配の実態を明確に把握した上でシャイバーン朝及びサファヴィー朝の政権確立の同時代的な意義を理解しているわけではない。^②一六世紀初頭の東方イスラーム世界における変動を正確にとらえるためには、「国民意識」や「スンナ派とシーア派の対立」といった遡求的な問題意識を一旦排除した上で、シャイバーン朝とサファヴィー朝の創設期における定住民支配の実態、及び両者の違い、を明らかにしなければならない。定住民支配とはオアシス支配・都市支配に他ならない。非常に近い時期に、この二つの新興王朝の支配を受けた同一都市の事例は、比較考察のための貴重な材料を提供してくれるであろう。本稿で取り上げるのは、ホラーサーンの中心都市ヘラートである。

ティムール朝最後の英主 *Sultān Husayn Mirzā* (在位一四七〇—一五〇六) の治世、首都として、また文化都市として繁栄を極めたヘラートは、一五〇七年シャイバーン朝の創設者 *Saybāni Hān* (在位一五〇〇—一五二〇)、次いで一五一〇年にはサファヴィー朝の創設者 *Shāh Ismā'īl* (在位一五〇一—一五二四) によって占領される。ティムール朝時代のヘラートに関する研究は豊富であるが、ティムール朝滅亡後、即ち政治的混乱の中で衰退へと向かう時代のヘラートが研究者に注目されることは殆どなく、これまで、この二つの新興王朝各々の支配開始時に如何なる情況が生じていたのか、政権交代が住民に及ぼした影響は那辺に認められるのか、という根本的な問題が検討されたことはなかったのである。そこで本稿では、この問題に対する何らかの解答を得るため、*Saybāni Hān* 及び *Shāh Ismā'īl* のヘラート占領時の情況を明らかにすると共に、その前後を通じての住民の動向や、君主及びそれを取り巻く人々との関わりについても考察する。また、その際、シャイバーン朝とサファヴィー朝のヘラート支配の在り方の、共通点と相違点を確認して、各々の特色をより明瞭に

した」と考ふる。勿論、本稿の目的は筆者なりの観点からクラートの事例を提示することであり、王朝それ自体の性格にまづ言及しようという試みではなからざることを予め諒承されたらう。

尚、本稿で利用した主要史料の略称は以下の通りである。^④

Anonymous : Anonymous, *Tārīḫ-i Šāh Ismā'īl-i Šāfawī* (史蹟), ms. British Library Or. 3248.

Bābur : Zahir al-Din Muhammad Bābur, *Bābur-nāma*, ed. A. S. Beveridge, London, 1905.^⑤

Badā'ī : Zayn al-Din Mahmūd Wāsiḫī, *Badā'ī al-Waqā'ī*, ed. A. H. Bonjlappeh, 2 vols, Moscow, 1961.

Habīb : Ḥwāndamīr, *Habīb al-Siyar*, ed. Muhammad Dabir Siyāqī, IV, Tehran, 1333.^⑥

Jang : Amīr Mahmūd b. Amīr Ḥwāndamīr, *Jang-nāma-yi Šāh Ismā'īl wa Šāh Tahmāsp* (史蹟), ms. British Library Or. 2939.

Mudākķir : Sayyid Ḥasan Nisāri Buḥārī, *Mudākķir-i Akbāb*, ms. British Library Or. 11151.

Mu'minin : Qādi Nūr Allāh Šūstari, *Majālis al-Mu'minin*, ed. Ḥājī Sayyid Aḥmad, I, Tehran, 1375.

Nafā'is : Mir 'Alī Šīr Nawā'ī, *Majālis al-Nafā'is*, tr. Sulṭān Muḥammad Faḥrī Harāṭi & Ḥakīm Šāh Muḥammad Qazwīnī, ed. 'Alī Aṣḡar Ḥikmat, Tehran, 1323.

Rasā'id : Mirzā Muḥammad Ḥaydar Duḡlāt, *Tārīḫ-i Rasā'id*, ms. British Library Add. 24090.

Rasā'id / E : *An English Version*, tr. E. D. Ross, ed. N. Elias, London, 1895.

Rasā'id / S : C. C. Salemann, "Neue Erwerbungen des Asiatischen Museums", *Mélanges Asiatiques*, IX-3 (1887), 323-380.

Rawā'āt : Mu'in al-Dīn Muḥammad Zam'ī Isfāzārī, *Rawā'āt al-Jamāt fi Awṣāf Madīnat Harāt*, ed. Sayyid Muḥammad Kāzīm Imām, I, Tehran, 1338.

Sulṭāh: Faḍl Allāh b. Rūzbihān Ḥunji, *Sulṭah al-Mulṭah*, ed. Muḥammad 'Alī Muwāḥhid, Tehran, 1362.
Tuhfa: Saḿ Mirzā Šafawī, *Tuhfa-yi Sāmī*, ed. Rukn al-Dīn Humāyūn Farrūh, Tehran, 1347.
Zabdat: 'Abd Allāh b. Muḥammad b. 'Alī Naṣr Allāhī, *Zabdat al-Āṣār*, (B. V. Baḡrovč, *Sočinenija*, VIII, Moskva, 1973, 130-145).

- ① サフマザー朝初期の軍隊（キマール・ミン・軍）が主にトルコ系部族諸集団から成ったことについては、羽田正「サフマザー朝の成立」『東洋史研究』三七—二（一九七八）、二六—三九参照のこと。
- ② シヤイブーン朝に関するロシア・ソ連の研究については、И. Ю. Апанов, *Бухарское ханство в русской востоковедческой литературе*, Москва, 1981 参照のこと。M. E. Subtelny, "Art and Politics in Early 16th Century Central Asia," *Central Asiatic Journal*, XXVII-1-2 (1983) は、シヤイブーン朝に於けるシヤイブーン朝の文化的伝統の継承を論じたもの。サフマザー朝に関する主要な研究については、羽田正「後期イスマラム国家の支配——サフマザー朝の場合——」『講座イسلام』二（一九八五）、二二九—二三〇参照のこと。
- ③ 建造物等の位置比定による景観再構成の試みは、T. Allen, *A Catalogue of the Toponyms and Monuments of Timuriid Herat*, Cambridge, Mass., 1981 [以下「Allen 1981」と略記] に於いて大まかへ前進した。この基本的作業に基づいて、T. Allen, *Timuriid Herat*, Wiesbaden, 1983 [以下「Allen 1983」と略記] は「ヘラート史研究」の新しい方向を打ち出している。「書評：安藤史朗『東洋史研究』四四—四（一九八六）」。当時のヘラートにいた多くの詩人の内、特に、神秘主義詩人 Mawlanā 'Abd al-Rahmān Jamī (一四一四—一四九二) を文芸擁護者としてトルコ語詩人 Mir 'Alī Šir Nawā'i (一四四一—一五〇二) に関する研究が豊富で、E. 9. Berggren, *Isḡarānīe ṭurūḡ, IV (Hagou u Džakid)*, Moskva, 1965 を読むべきである。そのうち中々めづるべき宮廷詩人の個々についで考察して、前述の二大詩人の位置付けを述べた M. E. Subtelny, "The Poetic Circle at the Court of the Timuriid, Sulṭān Ḥusain Baiqara and its Political Significance", Ph. D. diss. Harvard University, 1979 [以下「Subtelny 1979」と略記] は、未公開ではあるが、新しい研究動向として注目される。
- ④ これらの文献の中には、本田實信、間野英二、堀川徹、羽田正の諸氏の御好意により利用し得たものが少なくない。ここに記して感謝の意を表す。
- ⑤ 本稿においては、間野英二「バーブル・ナーフ」の研究(一)「バーブル・ナーフ」日本語訳『京都大学文学部紀要』二二（一九八三）、同「バーブル・ナーフ」の研究(二)「カーブル章」日本語訳『同』二二（一九八四）を参照しており、引用部の訳文も殆どこれに従っている。
- ⑥ この刊本には誤植や校訂の誤りと思われる部分が多いので、一二七一年のテヘラン版と一二七三年のボン・ベイ版をも参照した。

表I 「ヘラート年表」(1500~1524年)

年 (西暦)	主な出来事	ヘラートでの出来事	ヘラートの統治者*
1500	Šaybānī Hān のサマルカンド入城		Sultān Ḥusayn Mirzā
1501	Šāh Ismā'il のタブリーズ入城, シーア派宣言	Mir 'Alī Šir Nawā'i 歿(1月3日)	
1506	ムルガープ河岸で Bābur を含むティムール朝連合軍の結成(10月26日), 進軍せぬまま解散	Sultān Ḥusayn Mirzā 歿(5月5日) Badī' al-Zamān Mirzā と Muẓaffar Ḥusayn Mirzā の同時即位(5月後半)	Badī' al-Zamān, Muẓaffar Ḥusayn
1507	Šaybānī Hān がヘラート近郊でティムール朝軍を破る(5月19日)	町の代表者たちと Šaybānī Hān の会見(5月21日) Šaybānī Hān の名でフトバが読まれる(5月27日)	Jān Wafā' Mirzā
1510	Šāh Ismā'il がメルブ近郊でシャイバーン朝軍を破り, Šaybānī Hān は戦死(12月2日)	Šāh Ismā'il の fath-nāma がもたらされる(12月9日) Šāh Ismā'il のヘラート到着(12月21日)	
1511	Bābur のサマルカンド入城(10月上旬)		Ḥusayn Beg Lalā Šāmlū
1512	Bābur と Amīr Najm-i Šānī がグジュドワーンにおいてシャイバーン朝軍に敗れる(11月12日)		Aḥmad Beg Šūfi Ügü
1513		Jānī Beg Sultān と 'Ubayd Allāh Hān によるヘラート包囲(1月中旬旬-3月11日) Timūr Sultān のヘラート占領, 2~3か月統治後マー・ワラーン・ナフルへ退却(8/9月) Abū al-Qāsim Baḥsī の乱 Šāh Ismā'il がヘラート近郊に到着	Timūr Sultān
1514	チャルディラーンの戦い(8月23日), オスマン朝軍がサファヴィー朝軍を破る	前年にひき続いて深刻な食糧難	Zaynal Hān Šāmlū
1516		Ṭahmāsp Mirzā のヘラート到着(4/5月) Amīr Hān の復興政策	Amīr Hān Mawšillū (Ṭahmāsp Mirzā)
1521		'Ubayd Allāh Hān のホラーサーン遠征 'Ubayd Allāh ヘラート近郊より去る(6月10日) Amīr Hān がヘラートの有力者 Amīr Giyās al-Dīn Muḥammad を謀殺する(6月13日) Dürmīs Hān のヘラート到着(11月7日)	
1522		Sām Mirzā のヘラート到着(8月10日)	Dürmīs Hān Šāmlū
1524	Šāh Ismā'il 歿(5月23日)		(Sām Mirzā)

* ティムール朝時代は首都であるので、君主名を掲げた(その他はハーキムまたはダルガと呼ばれる者達)。()内は名目上の統治者でサファヴィー朝の王子。

一 目撃者の記述に見る占領時の情況

Saybani Hān と Šāh Ismā'īl 各々のヘラート占領を目撃し、自らの著書の中に貴重な証言を書き残した二人の同時代人の存在が既に知られている。一四七五／七六年頃おそらくヘラートに生まれ、後にムガール朝君主に仕えた Hwān-damir と、一四八五年ヘラートに生まれ、後にシャイバーン朝のタシケントの統治者に仕えた Wasīfī である。本稿で利用する前者の著書 *Habīb al-Siyar* は、一五二四年サフヴィー朝治下のヘラートで完成され、ヘラートの統治者 Durmīš Hān Šamīl のドズマール Hwāja Habīb Allāh Sawajī に献呈された歴史書であり、後者の著書 *Bada'i' al-Maqā'i* は、一五三八／三九年に完成され、タシケントの統治者 Nawruz Ahmad Hān の甥 Hāsān Sulṭān に献呈された回想録である。^① このような、立場も形態も異なる二つの史料に書き残された目撃者の証言を、検討・比較することは、Saybani Hān 並びに Šāh Ismā'īl のヘラート占領に関する、より正確な情報を得るための必要不可欠な作業であろう。そのほか、Saybani Hān 次ぐに Šāh Ismā'īl のヘラート占領時の情況について、前述二史料の記述内容の検討・比較を中心に、他の諸史料で適宜補いつつ考察する。

(一) Saybani Hān のヘラール占領

『*Habīb*』^② はヘラート近郊に Saybani Hān がティムール朝軍を破ったのは、ヒシラ暦九一三年ムハムラーム月七日（一五〇七年五月一九日）のことである〔*Habīb*, 374-375〕。以下、『*Habīb*』に従ってその後の経過を辿ってみる。

戦いに敗れたティムール朝最後の二人の君主 Bādī al-Zaman Mirzā と Muzaḥḥar Husayn Mirzā は一旦ヘラートに戻り、翌朝逃走するが、その際 Muzaḥḥar Husayn Mirzā はヘラートのシャイフル・イスマラームと Amir Ġiyās al-Dīn Muḥammad と Qādī Iḥṭiyār al-Dīn Ḥasan によってヘラートの防衛に関して援助を求めた〔376〕。これらの者達は、

「町の保護は軍 (askar) によって可能となります。我々の努力だけでは、効果はないでしょう。」

と答えて取り合わなかったという [376]。ティムール朝の君主と軍隊の姿が消え、無防備となったヘラートにおいて、あの機会が開かれた。

ムハラム月八日 (五月二〇日) 金曜日朝、ヘラートのサイイド達とカーデー達と有力者達 (akābir wa ayyān) がシャイフル・イスラームのマドラサに集まり、起ってしまった出来事に関して協議を行った。大小様々な人々 (akābir wa aṣābir) の心は、Muhammad Ḥān Šaybāni に対する服従と従順の道を進むことに定まり、筆者 [≡ Ḥwāndamir] にこの旨を認めた上奏文 (‘ardādās) を書くよう命じた。そして、その書状を町のムフタスイブであった Mawlānā ‘Usmān の甥に持たせて派遣した。 [376] この上奏文に対する Šaybāni Ḥān の返信は、早速翌朝ヘラートに届けられる。

土曜日 (五月二一日) の朝 Mawlānā Bīnā^⑤ の兄弟が世界征服者の道を進む者のオルドッ (軍営) からヘラートに到着した。そして、王権の巢の宮廷の書記達 (munsiyār) がシャイフル・イスラームと Qādi Iḥyār al-Dīn Ḥasan 宛に書いた勅書 (niṣān) をもたらした。その内容は、「……(中略)……勅書 (niṣān) が届いたならば、心を落ち着け安心して世界の避難所の宮廷へと急ぎ、有力者達 (ašraf wa ayyān) の内相応じらうと思う者を皆同行させるべきである。」とごく普通のであった。 [377]

この要請に応じてシャイフル・イスラームをはじめ一〇名の有力者が Šaybāni Ḥān の許へと向かうことになる。Šaybāni Ḥān はヘラート近郊の Dīang-i Kāhidistān^⑦ に下馬して来たところ [376, 377]。ヘラートの有力者達を出迎えたのは、「Muhammad Ḥān Šaybāni の宮廷にせむつサヌル (宗務長官) の地位 (mansab-i sādārat)^⑧ だけでなく無制限の権力を持つことだ」 Mawlānā ‘Abd al-Rahīm Turkistāni と「キヤワーン監督 (isrāf-i diwān) の仕事を携わった」 Ḥwāja Kamāl al-Dīn Mahmūd Saḡarčī と、この二人が有力者達の到着を Šaybāni Ḥān に伝えた [377]。そして、ハンはこの二人の高官にあることを命じたのである。

Muhammad Ḥān [Šaybāni] は、ますヘラート住民の、「生命と財産の」安全保障金と献上金の額 (kammiyat-i māli-āman wa

pisakš wa säwuri-yi Harawiyān) を定め、それから有力者達 (akābir wa ayyān) を最も気高く高貴な会合に出席させるよう命じた。Mawlanā 'Abd al-Rahim u Hwāja Kamāl al-Din Mahmūd はそのことについて話し合い、以下の如く定めた。「庶民と手工業者 (āmma-yi rawāya wa muhtariāt) は、当時六ナシキー・ディーナール (dinar-i Kāpak) で流通していた一ミスカールのタンガチャ (tangāča) で一〇万タンガチャの分量を供出する。偉大なる有力者とソニルガル (恩賜地) の所有者 (akābir-i izān wa suyūrgaldārān) は、ハーン個人への進物 (pisakš-i hāssa-yi hān) として全部で二万タンガチャの分量を納める。また、一万五千タシナチャを Mawlanā 'Abd al-Rahim に献上すべし。」 [377—378]

この後ヘラートの有力者達はハーンに謁見を許され、その他のシャイバーン朝王家の人々やアミール達とも会見した後、町へ帰った [378]。ハーンと有力者達との会見で何が話されたかは詳らかでないが、この会見の後 Saybani Hān が「全ての熱意を不在者の財産 (amwāl wa jihāt-i gharib) と有力者達 (akābir) が受諾したものの徴収に充てた」という [378] のであれば、少なくとも前述の「安全保障金と献上金の額」が有力者達によって承認されたことは確かであろう。ムハッラム月一日 (五月三日)、「徴税人と兵士 (tāpsildārān wa askariyān)」の一同がヘラートに到着し、前述の額を一週間で徴収した [378]。Hwandamir はこれに続いて、ティムール朝後宮の婦女や「種々の貯えと貴重品」、及び「かの〔ティムール家〕一族のフミール達と重臣達 (umarā' wa arkan-i dawlat-i an dūdman)」所有の「現金 (nuqud) と諸物品」が掠奪に晒される様を悲嘆を込めて描写している [378—379]。ヘラートの金曜モスク (masjid-i jamī) で、フトバにおごつて Abū al-Hayr Hān u Saybāni Hān の名が読まれたのは、ムハッラム月一五日 (五月二七日) のことであつたと云う [379]。

以上に紹介した『Habib』の記述内容^④は、Saybāni Hān がヘラートを包囲・攻撃するまでもなく住民側が自主的に新しい支配者を受け入れたことを明らかにし、掠奪者集団としてのウズベク軍の姿を浮かび上がらせる。尚、ヘラート住民から徴収された合計一三万五千タンガチャという額については、一応の目安を示すことが可能である。『Rawdat』(一四九一—九二年完成)によれば、当時アスタラーバード地方 (hamlakāt) は絹生産が盛んで、商人が各地に絹を運び「ホラーサ

Han [= Saybāni Han] は非常に執念深い王 (paṣān) です。もし我々が抵抗を示すならば、征服後、我々を一人として生かしておかず、町全体を隸属させ、掠奪するべしと云ふ。一〇日なり一か月なり我々がこの行為を為せば効果はあるでしょうが、それがこういう結果をもたらすことにお気付き下せよ。」

と言つてこれに應じなかつたところ〔1118—1119〕。その後、「有力者達 (akabir) はシャイフル・イスラームのマドラサに集まり、城門の鍵 (kalidhā-yi sahr) を Saybāni Han の前に差し出すことを決定した」〔1119〕。そして、翌朝(五月二十四日)、「町の有力者達 (akabir) は、Hiyaban とおつて進物 (piskas wa sawuri) と共に城門の鍵をハーンの前にもたらした」と云ふ〔1121〕。一方 Wasifi の Gīyās al-Dīn Muhammad は、Hadīja Begim の財宝の隠匿やウズベクのファミールに捕えられた Hadīja Begim の侍女の救出に奔走するが、こういつた一連の行動故に自分達の身に危険が迫り、一旦ヘラートを離れることとなる〔1126—1140〕。

日付や Saybāni Han とヘラートの有力者達との会見の場所等については若干の齟齬が見られるものの、以上の『Badā'i』の記述内容は、有力者達が合議の上 Saybāni Han に対する服従を決定した点で、『Hiabib』の記述と全く一致している。Hadīja Begim の要請に対する彼らの返答は、先に『Hiabib』に見られた Muzaḥfar Husayn Mirza の援助要請に対するそれと同じく、より被害の少ない方法を取ろうとする彼らの冷静で現実的な姿勢を象徴している。少なくともヘラートの有力者達の間では、ティムール朝の残存勢力に期待して危険を覚悟で城門を閉ざそうという気運はなかつたのである。また、『Badā'i』の記述内容から、Saybāni Han のヘラート占領時に Wasifi が直接関わったのが、ティムール朝君主の王妃やその乳兄弟であるファミールが貯えた財宝の隠匿、あるいは婦女の保護であり、ウズベク軍の関心が専らそれらの行方に注がれていたことが窺われる。シャイムーン朝側の史書によると、Saybāni Han は Sultān Husayn Mirza の娘達、ミールザー達の妻達、ムズ達のハットン達」と Sultān Husayn Mirza, Badī al-Zamān Mirza, その他之王達 (salatin)、「そしてムズ達の財庫」を手に入れ、「その軍中にいた全ての者が財貨で裕福になった」と云ふ〔Zubdat, 135〕。

ティムール朝王家だけでなく、その「アミール達と重臣達」の「現金と諸物品」も掠奪に晒されたことが、既に『*Habit*』の記述から確認されており、ティムール朝王家と関係の深かった人々の財産は、掠奪の標的であったと思われる。Hwandamir は「ホラーサーンの王達と統治者達 (salatin wa hukkam) に仕えていたワズィール達とタジクの人々 (wuzarat wa mardum-i Tazik)」の中に、ウズベク軍の「不正と暴虐」を恐れて山中に身を隠した者達がいたことを伝えている (『*Habit*, 379』)。また、Hadija Begim の乳兄弟 Amir Sal Wali は、Wasim に次のように言ったところ。

「我々の家や我々の配下の者達 (muta'alliqan) の家に行くのは非常に無茶なことです。貴方の家も同様であるかも知れないが、貴方は有力者達 (akabin) やシャイフル・イスラームと大変特別な付き合いがあります。きっと貴方の家は何事もなく安全に守られてい
سۆزۈپۈچۈگۈپ。」(『*Badaxsh*, 1112』)

しかし、有力者達や一般住民からも相当な額が徴収されたことは、先に見た通りである。

以上の考察により、Saybani Han のヘラート占領時、Saybani Han が新しい支配者として住民側から殆ど無抵抗に受け入れられたこと、ティムール朝王家とその臣下達の財産や妻女がウズベク軍の掠奪に晒されたこと、ヘラート住民全体から多額の「安全保障金と献上金」が徴収されたこと、が明らかになった。ここで付け加えておかねばならないのは、ヘラート住民の生活を圧迫したのが Saybani Han とウズベクの兵士達だけではなかったということである。

ヘラート住民から徴収する額をディワーン監督官と協議して決定し、Saybani Han 個人に匹敵する額(一万五千タンガチャ)を有力者達から手に入れたのは、Saybani Han のサバル Mawlanā Abd al-Rahim Turkistani であった。彼はハーンの寵を得て、「国務と財務の全てのジャミ(jami' umur-i mulki wa mali)」に発言力を持つようになった (『*Habit*, 381』)。Hwandamir はこのサバルの悪行を次のように伝えている。

ヘウラー貌下は、ホラーサーン諸地方 (mamalik) のワタシ物件 (mawqūfat) を自分の息子達 [即ち] Mansūr, Qāsim, Yūsuf の間

で分割し、その収益の一〇分の二をサマル税 (rasm al-sādārat) とし、一〇分の一を徴収費 (rasm al-fahsil) として取得するよう定めた。彼はこの悪事のみならず、口実を見つけてはワクフに割り付け (hawālat) を行い、寄進者達から望みのものを取り上げた。^② [Habib, 383]

そして、「ティムール朝時代 (zaman-i Timuriyan) の規則に反して、その頃正税や臨時税 (mal wa jihat wa ihrajat) がワクフ物件に割り付けられた」ために、「慈善建造物 (biḡā-i hayriyyin)」は荒廃して行き、少なくとも一五二二／三三年までは、その影響が残っている [Habib, 383] のである。ティムール朝時代に盛んに建造され、それまで十分に機能していたと思われる宗教施設の荒廃は、サラマーや学生達に大きな打撃を与えたであろう。^③

また、Babur が Saybani Khan が「ヘラートで行った行方不明からやる行為」の一つが、「全ての詩人達と才人達 (jami' ah-i sir wa ah-i fab) や Mullā Binā'ī (本章註^②) に取られた」ことであると述べ、Binā'ī による詩人の財産の収奪を当て擦った詩を記載している [Babur, 206a]。この Binā'ī について後代の詩人伝は、

Mawlāna Binā'ī ẓāhir al-Dīn al-Binā'ī の創建にまつ「詩人の王」の地位 (mansab-i malik al-sharāf) を得、彼に同行してホラーサーンに赴いた。ヘラートにまつ、許せぬことか彼 [= Binā'ī] にまつて為された。一つには詩人税 (ḡali-i sa'iyin) を人々に割り付け (hawālat) たことである。 [Tulfiq, 169]

と伝えている。Saybani Khan の宮廷で地位を確立していたサドルや宮廷詩人も、文化都市ヘラートの富を貪ったのである。^④

(1) Šāh Ismā'īl のヘラート占領

一五二〇年二月二日メルヴ近郊で Saybani Khan を破った Šāh Ismā'īl は、メルヴ占領後、既にウズベク軍が撤退していったヘラートの占領に着手した。『Habib』に見られる Šāh Ismā'īl のヘラート占領の過程は、以下の如くである。

ヒジュラ暦九一六年ラマダーン月八日(一五〇年二月九日)の朝、Sah Isma'il のフアトフ・ナーマ(勝利通告書)が届けられることを既に知っていたハラートの「サイイド達と有力者達(mawālī wa a'yān wa ahālī)」が「進物(yarāq wa piškās wa sāwūr)について話し合うため、Sulfāniya のサイイドの館(dār al-siyāda)に集まった〔Habīb, 514〕。この時、ハラートの町に暴動が起ったのである。

暴徒(mardumān-i awbās wa falihān-i fitna)の一団が攻撃の叫び声を上げ、技き身の剣を持ってその建物に入ってきた。そして、町(シヤフナ(密地))にあった Muhammad Lagūr と、人々に対して良い行いを示さなかった Muhammad 'Alī 'Asās [asās は「夜警」の意]を有力者達(akābir)の面前で殺害した。騒動の有り様は激しいものとなり、サズン族(qawm-i Ūzbak)と少くも関係のあった人々の内約百人が殺された。〔514〕

シヤールのフアトフ・ナーマを携えた Amir Najm (al-Dīn)-i Sāni の部(幕僚) Qulī Jān Beg が、同日中ごろハラートに到着し、この暴動を鎮めてフアトフ・ナーマを有力者達(āsrāf wa a'yān)に渡した〔514〕。

翌日(二月一〇日)貴賤様々な人々(ḥawāṣ wa 'awām)が金曜モスクへと急ぎ、Hāfiz Zayn al-Dīn Ziyāratgāhī がシヤールのフアトフ・ナーマを読むためにミンバルに上った。そして、その喜びに満ちた通告書(mansūf)を美声と魅惑的な調子で読み上げた。しかし、ミンバルの下にいた信仰の戦士達(gazīyan)に指をされたにも拘らず、雄々しくシヤール——彼の上に祝福と許しあれ——と対立する者達(ファ'n-i muhālīān-i sāl)を述べなかつた。そのため彼は懲罰を受け、正己モスクの中で、Qulī Jān の剣の傷により魂を死の使者に引き渡した。そして、このため、様々な集団の人々の心はこの上ない恐怖に支配され、モスクから散り散りに逃げ出した。〔514—515〕

この事件の後、Hwāja Muzaffar Bittakī が「有力者達(akābir wa āsrāf)の慰撫とフアトフ・ナーマ一族(dudman)の榮譽ある宗教(milat)の強化」に関する Sah Isma'il の勅書(nisān)をハラートにまたらし、金曜日にはこの勅書が読まれ、フトフにおいて「二人のイマームの輝かしい行為」が語られた〔515〕。次いで Amir Najm-i Sāni がハラートに到着し、

Sah Ismā'īl の到来は更に後のことと、[「ライダーン月」二〇日(二月二日)の朝、有力者達(akābir wa a'ālī wa ashāb-i majd wa marāli)のみならず貴賤様々な人々の大多数(alsar-i hawāss wa awāmm)が喜びに満ちて華麗なる天の行列を歓迎した]と云う[515]。

以上のような『Habīb』の記述内容から、Sah Ismā'īl が Saybāni Hān の場合と同様に、新しい支配者として無抵抗に受け入れられたことが明らかであり、加えて、Hwandamir が Sah Ismā'īl のヘラート占領をシャイバーン朝の庄政からの解放として描こうとしていることが理解される。サファヴィー朝側の猷皇史書という性格と不可分のこのような描き方は、シャイバーン朝の庄政に苦しんでいたと思われる人々の暴動によって正当化される。「ウズベク族と少しでも関係のあった人々」以外のヘラート住民にとって、キズィルバーシユ軍はまさしく救世主軍^{マフディー}であったのであろうか。しかし、金曜モスクにおける Hāfīz Zayn al-Dīn 殺害事件がヘラート住民に「この上なき恐怖」を与えたことも、また事実である。「シャーと対立する者達」とは、一体如何なる人々のことを指しているのであろうか。

『Badā'i』では、Wasīfī の友人 Mirzā Bayram なる人物にまつわる逸話の中で、Sah Ismā'īl のヘラート占領時のことが語られている。『Habīb』とは全く異なった立場からの記述は、Hāfīz Zayn al-Dīn 殺害事件の詳細を含め、非常に興味深い事実を明らかにしてくれる。

ある夜、Wasīfī が自宅で友人達と Sah Ismā'īl の到来について語り合っていた時、Mirzā Bayram が震えながらやって来て、Saybāni Hān の敗死と「Qulī Jan と云う名の Amir Najm-i Sāni の甥が Sah Ismā'īl のマフ・ナーマをまとらした」ことを伝えた[Badā'i, 1057]。翌朝、有力者達(akābir wa asrāf wa ahālī wa mawālī)が金曜モスクに集まり、「Mawlāna Saraf al-Dīn Ziyārātghāhī の子孫(awlād)の一人であった Hāfīz Zayn al-Dīn」が選ばれてマフ・ナーマを読み始めた[1058—1059]。そして、次のような出来事が起ったのである。

フアトフ・ナーマの、教友達(saliba)の内、七人に呪い(ʿaḥ)をかけることが命じられている部分にまで達すると、Ḥafiz Zayn al-Din はシャイフル・イスラームと有力者達(akābīn)の方を見た。シャイフル・イスラームは言った。

「おや、ハーフィズよ。騒動を起こすな。人々の血を流すな。[フアトフ・ナーマの中に]述べられていることを全て言うのだ。」
Ḥafiz Zayn al-Din は呪いに関する凡そ一〇行を読み飛ばした。Quli Jan は怒って言った。

「シャーの勅書(misān)の中で囁しを為すとは何という奴だ。」

[Ḥafiz Zayn al-Din と対立してゐた] Ḥafiz Hasan 'Ali が言った。

「彼がどうして呪いをかけざるであらうか。彼の名は Zayn al-Din *Abu Babr* であり、彼の祖父の名は Saraf al-Din *Usmān* であるのだから。」

……(中略)…… Mir Quli Jan は立ち上った。そして、Haydar 'Ali Maddah をミンバルの上に行かせた。乃ち [Haydar 'Ali Maddah は] 彼の髭と衿を掴んで言った。

「おや、逸脱者(ḥarīf)よ、早く呪いをかけろ。」

そして、彼に言葉を発する暇も与えないでミンバルから引き摺り下ろした。また床に足を下ろさないうちに一人のキズイルバーシユ(Qizilbas)が剣を彼の頭に打ちつけ、彼の肩の間が裂けた。約一〇人のキズイルバーシユがミンバルの下で彼を切り刻んだ。その瞬間、金曜モスクの中に終末の日の太陽が昇った。確かに Mawlanā Nur al-Din 'Abd al-Rahmān Jamī の弟子(murīd)の一人であつた良きハーフィズが言った。

「気の毒なことだ。Ḥafiz Zayn al-Din は殉教者(sahīd)となつた。」

「キズイルバーシユ達は」彼をも切り刻もうとした。ある人々が[助名を]嘆願して四千ハーニー(hanī)を請け負つたので彼は救われた。[1059—1061]

このような出来事に金曜モスクの中は騒然となり、Mawlanā 'Abd al-Rahmān Jamī の息子、シャイフル・イスラーム、そして幾人かの有力者達(akābīn)が気絶して外へ運び出される一方、屋根の上にはいた人々の多くが下に落ちて腕や脚を折

り、凡そ七人が死ぬという有り様であった〔1061〕。金曜モスクにいた Waṣīfī と Mirzā Bayram は、その場を離れて Sultān Husayn Mirzā の イムラサ と ハーンカー の前まで辿り着いた〔1061—1062〕が、金曜モスクの外でも騒動が起っていたのである。

金曜モスクからその場所に到着するまでに、我々は、槍に突き刺された凡そ五〇の首を見た。「槍を持った人々は」運びながらこう言っていた。

「おお、逸脱したスンナ派の犬共 (sunni saḡān-i-hārit) よ。戒めとせよ。」

また、有名な背教者 (rāddī) であった Mīr Sanātaras が教友達に対する呪い (lan-i-ashāb) をイラク調 (ahāng-i-īraq) で吟じた。そして、彼の下に約千人が集まり、その「呪いの」言葉を唱えながら、*ḥiḥābān* の先の方へと向かった。彼らと同行することになった者は誰も引き返すことができなかった。そして、「この集団は」常に「誰かの」首を槍に突き刺しながら進み、*Mawānā Nūr al-Dīn 'abd al-Rahmān Jāmī* の廟 (*mazar*) の所に到着した。約一万人が集まっていた。その建物の何処かにあった扉、窓、椅子、板を全てマウラーの墓 (*qabr*) の上に投げた。その高さは、廟のイーワーンの先端程になった。その後、火を放ったのである。……(中略)……私と Mirzā Bayram は離れ離れになってしまった。Mugriyān の街区 (*mahalla*) の辺りでは、群衆が呪いをかけていた。私と数年来の付き合いで、スンナ派教徒 (*sunni*) であり、イスラーム教徒 (*musalman*) である、と信じていた一人の学生 (*talīb-i-ilm*) が現れた。私は彼に言った。

「おお、友よ。我々はどうして「こんな所に」立っているのだろうか。この下らない言葉をいつまで聞くのだろうか。さあ、一緒に行こう。」

その不吉なる者が叫んだ。

「おお、友たちよ。来てくれ。見よ、逸脱者 (*ārit*) だ。」

このように彼が言うと、その人込みが蠢いた。私はすぐに自分の頭を下げて人込みの中に入り込み、その悪党から遠ざかった。「群衆は」私を捜し始めた。〔1062—1063〕

そして、Wasifi は命を狙われ逃げ惑うが、結局この集団は、別人を Wasifi と間違えて殺害し、その首を槍に突き刺して去って行ったところ [1064-1066]。

『Badāʿi』の記述内容に従えば、キズィルバシーによる Hafiz Zayn al-Din 殺害の原因は、彼が一七人の教友に対する呪いを読み飛ばしたことにあった。また、彼と対立していた Hafiz Hasan 'Ali の発言内容から、一七人の教友の中に初代と第三代の正統カリフ、アブー・バクルとウスマーンが含まれていたことも明らかであろう。『Habib』より後の Sah Ismaʿil 史では、Hafiz Zayn al-Din が「第三代までのカリフに対する呪い (al-ni bulata-yi sulis)」を拒絶したために殺害されたところ [Anonymous, 194b]、Hwandamir の息子に「両シャイブ (saydayn) 即ちブノー・バクルとウマル」の扱いをめぐってこの事件が起ったと伝えている [Lang, 66b]。このような諸史料の記述から、先に『Habib』に見られた「シャーと対立する者達」という言葉が、第三代までの正統カリフを含む一七人の教友を指していることが理解される。Hafiz Zayn al-Din はサファヴィー朝シーア主義の犠牲者であったと言えよう。しかし、Wasifi が記すシャイフル・イスラームの彼に対する忠告は、住民の安全のために敢えて教友に対する呪いを容認するという態度もあり得たことを示しており、Hafiz Zayn al-Din の如き厳格さがヘラートにおいて一般的であったと考える根拠は何処にもない。

この Hafiz Zayn al-Din 殺害事件を契機として起ったと思われるのが、スンナ派狩りとも呼ばれる暴動と、Maw-lāna 'Abd al-Rahmān Jami 廟の破壊である。言のまじきまじき Maw-lāna 'Abd al-Rahmān Jami はスンナ派のナツィン・ンディイ教団^⑩に属する神秘主義者である。ここで注意を要するのは、これらの出来事に関する『Badāʿi』の記述の中に「キズィルバシー」という語が全く見られないこと^⑪で、スンナ派狩りと高名なスンナ派の神秘主義者の聖廟破壊がヘラート住民によって為されたことは明白である。特に Maw-lāna 'Abd al-Rahmān Jami 廟の破壊は、これらヘラートにおける Sah Ismaʿil 並びにキズィルバシーの狂信的行為の一として挙げられべきであった。Wasifi の証言は貴重である。では、ヘラート住民の内如何なる人々が如何なる理由で、このような行動を示したのであろうか。そして、

スンナ派狩りの標的となったのが、実際に厳格なスンナ派教徒であったのであろうか。Wasifiをスンナ派狩りの標的としたのは、「スンナ派教徒である」と「信じていた」自身の友人であり、Wasifiが「(おそらく教友達に対する)呪い」を「下らない言葉」と言ったことがその直接の原因になったと思われる。この友人は、共に Wasifi を追跡する人々に対して次のようにも言ったという。

「此奴〔= Wasifi〕は、Sah Isma'iliとその一門 (silisla) を全て風刺した人物だ。シャーに対する贈物として彼ほどのものはない。」
[Badz'ī, 1065]

Sah Isma'iliに阿るために数年来の友人を殺害しようとする一学生の姿と、不用意な発言のために「逸脱者」としてスンナ派狩りの標的となった Wasifiの姿が、この時のヘラートの状況を象徴しているのではなからうか。

サファヴィー朝成立以前の東方イスラーム世界において、スンナ派とシーア派の区分や対立を考える時、そこには混沌とした環境が浮び上がり、サファヴィー朝創設期のシーア主義も確固たる学問的伝統に基づくようなものではなかった。^④

この頃シーア派表明の証しとして重要な役割を果たしたのは、既に H. Gassen が指摘しているように、第三代までの正統カリフに対する呪い (Janat) とシャーの崇拜 (sijda) であり、厳格なスンナ派学者の代表とされる Faql Allah b. Ruzbihān がサファヴィー朝の一二イマーム派シーア主義を攻撃するもの、正にこの二点に過ぎなかったのである (Suzuk, 397-398, 425)。このように形式的で単純なものであるならば、宗派を尺度として暴動に加わった者達とその被害者達を区分することはできない。実際には、金曜モスクにおける Hafiz Zayn al-Din 殺害事件によって恐慌状態に陥った者達が、自分の身を守るため、あるいはサファヴィー朝側に阿るために、Mir Sanataras の如き扇動者の言葉に扇られてこのような暴動を起こし、適当な口実の見出せる人物を「逸脱者」として殺害したものと思われるのである。

以上の考察により、Sah Isma'iliのヘラート占領時、Sah Isma'iliが Saybani Khan の場合と同様に住民側から無抵抗

に受け入れられたこと、住民の一部が、ウズベク族と関係のあった人々に対する報復を行ったこと、金曜モスクにおけるキズィルバシーの残虐な行為が、住民の一部を反スンナ派の暴動へと導いたこと、が明らかにされた。

尚、*Sah Isma'il* のハラート占領については、*Hwandamir* と *Wasifi* の外に、同じくハラート在任の *Amir Sadr al-Din Sultan Ibrahim Amin* が、*Sah Isma'il* の依頼で執筆したその著書 *Futūḥāt-i Sahi* の中で、証言を書き残している^③。本稿では、この史書の原文は参照すべきなかったが、*J. Aubin* によると、*Sah Isma'il* のハラート占領後、シャイバーン朝時代に横領されていた耕地 (*qaḥ*) と不動産 (*amlak*) が元の所有者に返還されたことや、ワクフ文書の確定が為されたことが記されているという^④。このような事実は、ハラートにおけるサファヴィー朝の善政を裏付けることになるが、他方では、キズィルバシーによって財産を強奪されたカーディーの存在をも伝えているという^⑤。ウズベク軍と同じくキズィルバシー軍もハラートにおいて掠奪行為を行ったのである。しかし、サファヴィー朝の場合には、シャイバーン朝におけるサドルや宮廷詩人の如き、軍人階級に属さない掠奪者の存在は確認されない。

① *Hwandamir* の生涯については、簡単なものには *Hwandamir, Mikhrim al-Milq*, ed. T. Ganjei, Cambridge, 1979 に付された本文が参考になる。Wasifi の著書 *Bada'i al-Waqa'i* については、*Subteily* 1979, 47-59; *Manerady* no *istomru Kazaxskix xaxota*, Alma-Ata, 1969, 172-177 を参照するが、最も詳細な研究 A. H. Болдырев, *Zahir-ad-din Baxshi, Tadzhikskij pisatel' XVIIv.*, (*Опыт творческой биографии*), Станнабад, 1957 は今回利用できなかった。尚、*Bada'i al-Waqa'i* の概略は A. H. Болдырев, "Межыара Заин-ад-Дин Восифи как источник для изучения культурыной жизни Средней Азии и Хорасана на рубеже XV-XVIIвв.," *Труды Института Востоковедения Государственного Эрмитажа*, II (1939) [以下 "Болдырев 1939"] と略記], 213—269 に紹介されている。

② *Saybani Han* の事蹟はチャムール朝征服の過程については、A. A. Семенов, "Шейбани-хан и завоевание империи Тимуридов," *Труды АН Таджикской ССР*, XII-1 (1954) [以下 "Семенов 1954a" と略記] が詳しいが、堀川徹「シャイバーニー・ハンとブルーク城」『史料』六二—六（一九七九）、四八—五八におくても簡潔なまとめられている。Saybani Han のその他の呼称については、岡野英二「ムーブル・ムンディシャーフとハイダル・ミールザー——その相互関係——」『東洋史研究』四六—三（一九八七）、註⑬参照のこと。

③ 以上の三名は本稿の表Ⅱ「ハラートの主要な有力者達」の番号①、④、⑥の人物（後述）。

④ 表Ⅱ—①の人物によって建造されたもの (Allen 1981, 142)。本稿で言及するハラートの街区や建造物及びそれらの位置については、

“Alien 1981” 参照のこと。

- ⑤ ヘラート出身の詩人、ムルシヤ語散文の *Saybani-nama* の著者。Mir 'Ali Šir Nawwā'i に疎まれてヘラートを離れ、ブタ・コナント朝の Sulhan Ya'qub の下で保護を受けた後、今度は Saybani Han の高延びて地位を確立して来た [Subletiny 1979, 124-128]。
- ⑥ 表Ⅱで取り上げた人々（後述）。
- ⑦ ヘラート近郊（ヘラートの東）にあった牧草地 (Alien 1981, 83)。
- ⑧ シャイバーン朝初期のサドルの職務内容は未だ明確にされていないが、ティムール朝時代のサドルは、シャリーフに関する職務を有する著者 (シャイフル・イスマームは除く) を統轄し、ワタクを管理したと考えられる [H. R. Roemer, *Staatsarchiven der Timuridenzeit. Das Sayf-nama des 'Abdallah Marwarid in kritischer Auswertung*, Wiesbaden 1952, 144-145; 岡野英一「ティムール朝の社会」『岩波講座世界歴史』八(一九六九)以下「岡野 一九六九」と略記]「三〇—三一一」。実際にこの人物は、シャイバーン朝治下のヘラートにおいて新たにカーディー、ムフタスィブ等を任命し、ワタクの運営にも介入している(後述)。
- ⑨ トゥルキスターン地方(シル河中流域)の出身で、Saybani Han が「トゥルキスターンの境域に到着した時」その臣下になったと云う [Habib, 381]。尚、トゥルキスターン地方は Saybani Han の勢力基盤でもある [堀川、前掲論文]。
- ⑩ Qwandamir は別の箇所で同じ人物が、Saybani Han の宮廷に在ける「マフラーン監督官の地位 (mansab-i israf-i diwan)」に在りたことを伝えている [Habib, 513]。マフラーン監督官については本稿第二章註⑨参照のこと。
- ⑪ この人物は Saybani Han の敗死後、サフマヴィー朝に受け入れられ、「財務官の地位 (mansab-i wizarat wa shah-i diwan)」を手に入

れた [Habib, 513-514]。

- ⑫ マフキー・マフラーンに引いては B. Bapromir, “Yrfoek n ero ipema,” *Сочинения*, II-2, 33 参照。
- ⑬ Saybani Han の祖父でシャイバーン朝王家の祖(一四二一—一四六八)。シャイバーン朝は Saybani Han を創設者とするが、その王家は Saybani 家ではなく Abn al-Hayr 家による。Abn al-Hayr 家(糸田) J.-L. Bacqué-Grammont, “Une Liste ottomane de princes et daparages abu'l-khayrides,” *Cahiers du Monde Russe et Soviétique*, XI-3 (1970), 428-429 に見られる。
- ⑭ Saybani Han のマフラーン領土に関する [Habib] の記述は Cemenon 1954a, 64-66 による比較的確切に紹介されている。
- ⑮ イル・ン・国時代、キントル族によってイランに導入された商税(タムガ税)は、ティムール朝時代にはシャリーフの規定に合わせるためにサカートと称された [W. Hinz, “Das Steuerwesen Ostanatoliens im 15. und 16. Jahrhundert,” *ZDMG*, C (1950), 191-192]。尚、タムガ税については、本田實信「タムガ (TAMGA) 税に就いて」『和田博士古稀記念東洋史論叢』(一九六〇)が参考になる。
- ⑯ 貨幣単位としてのトタンは一万ディナールを指す [B. B. Bapromir, “Персидская надпись на стене английской мечети Мануче,” *Сочинения*, IV, 323-324]。A. A. Cemenov は七〇万マフキー・ディーナールを換算して、三五万ルーブルと云う数字を導き出している [A. A. Cemenov, “Некоторые данные по экономике империи султан Хусейн-Мирзы (1469-1506),” *Известия Омбуделения общественных наук АН Таджикской ССР*, IV (1953), 79]。
- ⑰ 本田、前掲論文、八四三。また、マフラーン・ナフル、ホラーサン、ヒンドクスターンの中間に位置する交易の中心地カーブルに在りて、一六世紀の初頭に Babur が得ていた収入は、タムガ税のみ

③④ この人物がヘラートのシヤフナとなったのは、Saybani Han のクラーナ占領より前、少なくともチャムール朝最後の二人の君主の即位時（一五〇六年）に遡り〔*Fahib*, 364〕。また、サズスタ軍が撤退した後、ヘラートに留まりつづけたことなどから、土着のヘラート住民であると思われる。

③⑤ 本来の名は Yār Ahmad Huzarī であり、アフマーンの有力者の家系に属し、当時 Šāh Ismā'īl のモキールとして軍事・行政・財政の全てに権勢を振つづけた〔羽田正「フーザーニー家の人々——東方イスラム世界における一家の歴史——」『史学雑誌』九六一—（一九八七）以下「羽田一九八七」と略記〕四七—四九；J. Aubin, “Etudes Safavides. I, Šāh Ismā'īl et les notables de l'Iraq persan,” *Journal of the Economic and Social History of the Orient*, II-1 (1959) [以下“*Aubin 1959*”と略記], 67—70〕。

③⑥ アムタラーバーナにおける最も有力な家系（元はモンゴル系）に属し、ホラーサーン遠征途上の Šāh Ismā'īl のために伺候し、そのワズヤーンとなった〔J. Aubin, “Révolution Chirite et Conservatisme. Les soufis de Lahbejan, 1500-1514 (Etudes Safavides, II,),” *Moyen Orient et Ocean Indien*, I (1984) [以下“*Aubin 1984*”と略記], 16—17〕。

③⑦ Šāh Ismā'īl のクラーナ占領に関する『*Hadith*』の記述は、Rahim-zāda, *op. cit.*, 249-252 に若干の詳しく述べられている。

③⑧ 各節が挙げられているのは、表Ⅱ①②③④⑤⑥⑦他七名。

③⑨ ヒジャラのハーフェスにフヤーン・ナーヤを誦させるか、有力者間でも意見が分かれていた〔*Badā'i*?, 1059〕。

③⑩ 統づつ、この発言内容が正しく伝えている者（Mulla Yaqār Astārā-bādī）と Hāfiz Zayn al-Dīn の名は、*Alī b. āgha* と主語たる者（表Ⅱ①④の人物）の口論が記されている。『*Anonymous*』の記述に従えば、

Hāfiz Zayn al-Dīn の名は、*Alī b. āgha* (*Anonymous*, 194b)。^③彼の祖父はこうして、^④ 実際は、^⑤ Mawlanā Sarat al-Dīn *Usman Ziyāragāhi* とする。名の人物の存在を、確認せざるは、^⑥ [Mawlanā Fahr al-Dīn *Alī Rasāhid-i 'Ayn al-Hayāt*, ed. 'Alī Asgār Mir'injān, 2 vols., Tehran, 2536, 327〕。

③⑪ 『*Jang*』の当該箇所は、*sayhāyn* の前の語〔*qayyān* *subh* (侮辱)〕が塗り潰され、*lasrif* (敬意の表明) に書き換えられている。

③⑫ J. Aubin は、キズマルムーンチのシーア主義の実践として、フンディー信仰に基づく君主の崇拜、第三代までのカリフに対する呪詛、スンナ派著名人の墓の破壊、スンナ派のモスタの冒瀆、頑強なスンナ派教徒を拷問に処すことなどを挙げている〔J. Aubin, “La politique religieuse des Safavides,” *Le Siècle turc*, Paris, 1970, 238〕。

③⑬ ナツシハンブチャー教団、及びこの教団が秘密にクンナとシヤラーマを守らうとする立場を取つづけたことについては、岡野英二「ナツシハンブチャー教団に関する最近の諸研究について」『イスラム世界』二二（一九八三）、川本正知「ナツシハンブチャー教団の修業法について」『東洋史研究』四二—二二（一九八三）が参考になる。

③⑭ Wasīfi は、金座ギンスタの出来事に統づつ、「金座ギンスタの上からキズマルムーンチの一派が人々の頭上に金貨 (*asraḥā*) を注ぎこんだ」〔*Badā'i*?, 1061〕と記している。

③⑮ 例へば、A. A. Cemenov, “Первые упоминания и борьба за Мавераннахр,” *Труды АН Таджикской ССР*, XII-1 (1954) [以下“*Cemenov 1954b*”と略記], 112; H. Algar, “The Naqshbandi order: a preliminary survey of its history and significance,” *Studia Islamica*, XLIV (1976), 142 など。

③⑯ 『*Badā'i*』には、*sīstā-yi 'Uzbākīya* [1002] と *sīstā-yi Čagātay* [1105] といった表現が、Šāh Ismā'īl の *sīstā* をフンブチャー

二 ヘラートの主要な有力者達の動向

これまでの考察から、シャイバーン朝とサファヴィー朝によるヘラート支配の始まりは、かなり趣を異にするものであったと思われる。殆ど無抵抗に服従してきた住民に対し、前者は経済的な打撃を与え、後者は宗教上の問題を投げ掛けたのである。しかし、両王朝がヘラート住民に示した対応と政権交代の影響を、より具体的に把握するためには、加えて、住民の中のような集団や個人の動向を明らかにすることが必要であろう。その際、まず第一に注目しなければならないのが、『*Ḥabīb*』や『*Bādā'i*』における主に *akābir*（大人達）、*asāf*（貴人達）、*arjān*（要人達）といった語で示され、筆者が一貫して「有力者達」と訳してきた人々である。何故なら、これまでの考察過程を通じて、彼らが支配集団に対する住民全体の立場を決定し、住民の代表として支配集団との交渉を行う役割と実力を持っていたことが、既に明らかとなっているからである^①。また、この「有力者達」に属さないヘラート住民については十分な考察の手掛りを得られないというのが、史料の現状でもある。

先に見たように、Saybani Han のヘラート占領時、ヘラートの有力者一〇人が要請に応じて Saybani Han のオールドゥに赴き、「安全保障金と献上金の額」を受諾したことが『*Ḥabīb*』に記されている。この者達が、ティムール朝政権崩壊の時点で、ヘラート住民の代表となる資格を持ち、有力者達の中でも上位に位置付けられていたと考えて大過なからう。*Ḥwandamir* は彼らの名前を全て挙げており、その内九名までは、『*Ḥabīb*』をはじめ諸史料に少なからず登場する人物である（表Ⅱ）。シャイフル・イスラーム（表Ⅱ—③^②）は言うに及ばず、表Ⅱ—②^④、⑥、⑦の人物も、ヘラートの有力者としてまず名前の挙げられるべき存在であった（第一章註③、②、③、④、⑤）。そこで、ヘラートの主要な有力者としての九人を取り上げ、ティムール朝、シャイバーン朝、サファヴィー朝の各支配時代を通じての個々の経歴と動向を諸史料から跡付けて、それに考察を加えることとする。

表Ⅱ ヘラートの主要な有力者達

	人 名	ティムール朝時代 (～1507年5月)	ジャイバーン 朝時代 (1507年5月～ 1510年12月)	サファヴィー朝 時代 (1510年12月～)	付 記
①	Mawlānā Sayf al-Dīn Aḥmad al-Taftāzānī	シャイフル・イ スラーム (1483 年以降)	シャイフル・ イスラーム	刑死 (1510年12 月)	多くの弟子を 持つ学者、シ ャーフイー 派
②	Amīr Jamāl al-Dīn 'Aṭā' Allāh al-Ḥusaynī	マドラサとハー ンカーでの教職 (数年)		隠遁(1522/23年 以前), 息子が後任	サイド, 伝承学者
③	Amīr Niẓām al-Dīn 'Abd al-Qādir (al-) Maṣhadi	マドラサでの教 職(長年), ナキ ープ, カーディ ー	ナキープ, 大カーディー	反サファヴィー 朝の立場, 死没(1519年)	サイド
④	Amīr Ġiyāṣ al-Dīn Muḥammad b. Amīr Yūsuf al-Rāzī	マドラサでの教 職(数年)	Šaybānī Hān に厚遇される	カーディー, サ ドル, アミール, 謀殺される (1521年)	サイド, レイ出身
⑤	Amīr Šadr al-Dīn Yūnus al-Ḥusaynī	3つのマドラサ での教職(長年)	ムスタスィブ (1～2年), バルフのシャ イフル・イス ラーム	バルフのシャ イフル・イスラ ーム, 刑死(1513年)	サイド
⑥	Qāḍī Iḥtiyār al-Dīn Ḥasan al-Turbatī	最有力のカーデ ィー	カーディー	帰郷・隠遁(1510 年12月以降), 病没(1521/22年)	ハナフイー派, サイド, ザーヴェ地方 出身
⑦	Qāḍī Šadr al-Dīn Muḥammad al-Imāmī	カーディー (1486年以降)	カーディー	シャイフル・イ スラーム (2～ 3年), 隠遁	ソユルガルと 免税地の保持
⑧	Amīr Raḍī al-Dīn 'Abd al-Awwal al-Ḥusaynī	2つのマドラサ のムダッリス		死没(1521年)	サイド
⑨	Ḥwāja Jamāl al-Dīn 'Aṭā' Allāh	ワズィール, デ ィーワーン監督 官, 勅書官, 隠遁 (1506年5 月以降)	隠遁	隠遁, 親サファ ヴィー朝の立場, 病没(1521年)	アミールやワ ズィールの願 問的存在
⑩	Ḥwāja Niẓām al-Dīn 'Abd al-Ḥayy Šāhib-i 'Iyār		——— [不 明] ———		šāhib-i 'iyār は「試金者」の 意

①～⑩の番号は『Habib』に記載されている順番〔Habib, 377〕に従っている。

Mawlānā Sayf al-Dīn Aḥmad al-Faṭṭāzānī (表11-①)

この人物は、ティムール朝の創設者 Amir Timūr (一三三六一四〇五)時代の高名な学者 Mawlānā Sa'd al-Dīn Mas'ūd al-Faṭṭāzānī^④の曾孫に当り、自身もローラン註釈学、伝承学、法学の知識を有する学者で、父の歿後シャイフル・イスラームとなり、約三〇年間この地位にあった〔*Habib*, 349〕。勿論彼の父(一四八三年歿)も Šāh Rūḥ Mirzā (在位一四〇九—一四四七)時代から Sulṭān Husayn Mirzā 時代にかけてのヘラートのシャイフル・イスラームの代表者で、このタフターザーニー家がホラーサーン諸地方(mamalik)におけるシャイフル・イスラームを輩出してきたことと、〔*Babur*, 177b〕。Mawlānā Sayf al-Dīn ʿaṣ-Ṣaybānī Ḥān のヘラート占領後も「ヘーンの指示(isarat)」によってこれを通じて「世襲の地位(mansab-i mawrūsī)」を受け入れることが要請された〔*Habib*, 382〕。しかし、Šāh Ismā'īl がヘラートを支配下に置いた一五一〇年十二月、「私心ある者達の誹謗(sī'āyat-i aṣḥāb-i ǧarad)」によって彼の懲罰と逮捕を命じた勅令(farman)が出され、「王の判断(taqdir-i padšah)」に基づいて殺害されたことと、〔*Habib*, 349〕。また、先述の *Futūḥāt-i Šāhī* ʿaṣ-Ṣayf Ismā'īl のサマール Sayyid Šarif al-Dīn 'Alī の犠牲者であったことを伝えていることと、^⑤

このシャイフル・イスラーム殺害の場面を最も詳しく伝える同時代史料として『*Rasā'id*』が挙げられる。その記述によれば、Šāh Ismā'īl に呼び寄せられ、教友達(aṣḥāb)に呪い(tan)をかけてシーム派(maḥḥab-i šīm)に従うことが命じられたシャイフル・イスラームは、サファヴィー朝のシーム主義を徹底的に侮辱し、これに激怒した Šāh Ismā'īl 自身が放った矢によって殺害されたことになっている〔*Rasā'id*, 160b-161a; *Rasā'id* / E, 235-236〕。しかしながら、著者 Mirzā Ḥaydar 自身がサファヴィー朝のシーム主義を憎悪していたことを考えると、厳格なシーム派教徒の殉教とするこのような描き方を、そのまま受け入れることはできない。また、先にも触れたように、Ḥāfiz Zayn al-Dīn に対するシャイフル・イスラームの忠告の内容は、決して頑強なシーム派教徒のものではなく、彼の穏当な考えを表している。『*Rasā'id*』とは逆にシーム派の立場で書かれた『*Mawāzin*』では、シャイフル・イスラーム処刑の理由は、Sulṭān Husayn Mirzā 時代の

ハラートにおける、ある事件にまつたとされている。それは、第三代までの正統カリフを中傷 (fa'n) し、呪い (lan) をかけたためにシャイフル・イスラームの前に引つ立てられたコム出身のあるサイイドを、彼が Sulṭān Husayn Mirzā の所へ連れて行き、ミールザーに処刑を命じさせた [*Mu'minin*, 85-86] というものである。このサイイドの親族 (pawisan) は Sāh Ismā'īl に事の次第を上奏し、ホラーサーン征服が成ればシャイフル・イスラームの殺害を許可するといふ勅令 (farman) を得て、実際に Sāh Ismā'īl のハラート占領後シャイフル・イスラームを捕え、シャーの承認の下に殺害したという [*Mu'minin*, 86]。後代の史料でも『*Mu'minin*』(一六〇二年完成) の記述を全面的に信用することはできぬが、^⑧これと極めて似通った出来事を他ならぬ Wasīfī が書か留めておるのである。Wasīfī による Sāh Ismā'īl のハラート占領の一五年前、Hasan 'Alī Maddāh なる人物が「預言者の教友 (aṣḥāb-i paygambar) の一人に呪い (lan) をかけたため、先述の Wasīfī の友人 Mirzā Bayram は彼をシャイフル・イスラームの所に連れて行き、その背教 (rafḍ) を証言して殺害した」 [*Bada'i*, 1056-1057]。ネムブ、Sāh Ismā'īl はそのハラート占領の六か月後、Hasan 'Alī Maddāh の兄弟が Mirzā Bayram に復讐すべく、イラクからハラートにやってくるため、Mirzā Bayram はハラートを離れたという [*Bada'i*, 1072-1073]。Hasan 'Alī Maddāh がコムトのサイイドであったかどうかは不明であるが、このような過去の事件は、十分にシャイフル・イスラーム Mawlānā Sayf al-Dīn に対する「誹謗」の要因となり得たであろうし、シーフ派を除く「その他の諸宗派 (madāhib) と諸宗教 (adyan) の礎を根刮にした」と伝えらるる [*Naf'is*, 385] サレム ^⑨ Sayyid Sarif al-Dīn 'Alī が彼の処刑に直接関与したのも、このためと思われるのである。

Qādi Iḥṭiyār al-Dīn Hasan al-Turbatī (表II-⑥)

この人物はザウウニ地方 (wīlayat) の出身で、ハラートに赴いて修学、Sulṭān Husayn Mirzā の晩年にカーディーとなり、「首都ハラートの全てのカーディー達の中で最も権力を持ち、最も信頼された」といふ [*Habit*, 355-356]。そして、会合においてはシャイフル・イスラームと上座を争い、「若干の会合 (majlis) では、シャイフル・イスラームが Qādi Iḥṭiyār

より上席を占め、また別の若干の会合では後者がその上席を占めた」〔*Bābur*, 179a〕程であった。また、Saybāni Hānがヘラート占領時に町に送った勅書が、シャイフル・イヌラームの Qādi Iḥṭiyār al-Dīn 宛のものであった(既述)ことも考え合わせると、彼がシャイフル・イヌラーム Mawlāna Sayf al-Dīn と並んでヘラートの有力者の筆頭に位置付けられていたと見做すことができよう。Qādi Iḥṭiyār al-Dīn は Saybāni Hān のヘラート占領後も「引き続き」カーディーンに任じられた〔*Habīb*, 356, 382〕が、Saybāni Hān の敗死後、故郷に帰って農耕に従事し、病歿(一五二一―二二年)後は同地に埋葬をせられたと云う〔*Habīb*, 356〕。Hwāndamīr はこの人物の帰郷を Saybāni Hān の敗死後とするが、Sah Ismā'īl のフマトフ・ナーイマが読まれた時までは、ヘラートに存する存在が確認され(第一章註⑤)、『*Furūḡat-i Sāhi*』や『キズィルバーシ』達がこの人物から、懲罰として多額の現金を強奪したと伝えられてくるという。〔現金(zar)を集めることと吝嗇ぶり(imṣāk)でこの上なく有名であった〕〔*Tuḡfa*, 49〕Qādi Iḥṭiyār al-Dīn の財産を奪うため、キズィルバーシ達は如何なる口実を用意したのであるだろうか。このような仕打ちこそ、Qādi Iḥṭiyār al-Dīn はサフアヴィー朝の版図外へは逃亡せず、彼が故郷に帰ってから詠んだと思われる Sah Ismā'īl 賞賛の詩句や伝えられたこと(『*Tuḡfa*, 49〕)しかし、それだけでサフアヴィー朝側との良好な関係を想定することはできなう。他方では、彼の息子がシャイムーン朝治下のシャフリ・サブズでカーディーンの地位に就いてくるのである〔*Mudakkir*, 97a-b〕。

Amir Giyaṣ al-Dīn Muḥammad b. Amir Jalal al-Dīn Yūsuf al-Rāzi (表一④)

前述二者と対照的な経緯を辿ることになるこの人物は、レイのサイドの家系に属し、父親がヘラートに移住したためにヘラートで育った〔*Tuḡfa*, 34〕。著名な学者であった自身のおじやシャイフル・イヌラーム Mawlāna Sayf al-Dīn の下で学んだ後、彼自身も数年マタラサで教育(dars wa ifāda)に従事し、Sulḥān Ḥusayn Mirzā 歿後、Badr' al-Zamān Mirzā 及 Muzaḥḥar Ḥusayn Mirzā 次ぐ Saybāni Hān と厚遇されたように〔*Habīb*, 581-582〕。Bābur は Saybāni Hān 討伐を夢見てホラーサーンを訪れた時(一五〇六年)、王子達と共に Bābur を出迎えたのが前述の Qādi Iḥṭiyār al-

Din への Amir Ġiyās al-Din の二人であり [Bābur, 179a]。マズンダ軍に敗れた Muzaffar Husayn Mirzā がシャイフル・イスラームと、この二人に対してクラート防衛の援助を求めた(既述)ことなどから、彼は、クラートの有力者達の中でシャイフル・イスラーム Mawlānā Sayf al-Din を Qādi Iḥṭiyar al-Din に次ぐ重要な位置を占めていたと考えられる。Amir Ġiyās al-Din は「シャイフル・イスラームの弟子(sāgird)でもあった」が、「後にシャイフル・イスラームは自分の地位(yer)に彼を掃えた」とする [Bābur, 179a]。せざるべし、高齡のシャイフル・イスラームの代役を果たしていたのであろう。そこで Šāh Ismā'īl のクラート占領後、彼は更に権勢を振るうことになる。Šāh Ismā'īl のクラート占領時に「ホラーサーン全土(tamāni-yi mamalik)のカーチャーの地位」を得た [Ḥabīb, 516, 582] などと述ぶが、一五二六年 Amir Ḥān Mawṣillū (一五二〇年没)は Amir Sulṭān の呼称がクラートの統治者となると、そのサドルの地位にも就いた [Ḥabīb, 594]。一五二八年 Šāh Ismā'īl に謁見した時には、「イラクやパーセルバン、イシャーンの境界からトハリスターン及びのホラーサーン諸地方(wilāyat)に及びる」[マタン物件の管理(dābt wa rabi-i maḡūfāt)] が任せられ、クラートの統治者 Amir Ḥān Mawṣillū は「その他國務と財務の重要事(muḥimmāt-i mulki wa māli)」を Amir Ġiyās al-Din の承認の下に決定し、「クラータ河地方(wilāyat)の正税(māl wa jihat)を彼の従者達の俸給に要する経費(wajh-i mawāhib-i mulaziman)に充てる」などと定められたとする [Ḥabīb, 576]。この Amir Ġiyās al-Din は「軍事と指揮官としての(sipāhi-luq bilā sardar-luq)仕事にあつたや熱狂し」たと述べられる [Bābur, 179a] が、シャーンに謁見した正統の時、「太鼓と旗と馬と兵士の持主(sāhib-i tabi wa 'alam wa ḥayl wa ḥasām)」となり、「サドルとマシールの地位(mansab-i sadarat wa imārat)」を合わせ持ったのである [Ḥabīb, 576, 582]。

処刑されたシャイフル・イスラームの弟子であり、代役を務めたと思われる Amir Ġiyās al-Din が「サファヴィー朝時代に何故このよつな権勢を振る得たのであろうか。Wasīfī は、彼を「Šāh Ismā'īl の代理人(halifa)」と呼ぶ [Bādā'i, 318]。非難の調子を込めて「Šāh Ismā'īl の時代、野心のため偽りの井戸に落ち、シーア派への掃蕩(tasayyū)を表明し

て、彼らの一門 (silasila) の中で代理人の地位 (mansab-i halifaḡi) に就いた」と述べられている [Badā'i, 166]。また Bābur がこの人物が「シーア派教徒 (shī'i) であつたらしく」と伝へ [Bābur, 179a]、後代のシーア派教徒列伝にも同じく Amir Gīyās al-Dīn は取り上げられていく [Muzminn, 532-533]。しかしながら、彼が Sah Isma'īl のクラーン占領時に金曜キムタブ Hāfīz Zayn al-Dīn 擁護の立場を取つた [Badā'i, 1060 (第一章註⑧) ; Jang, 66b-67a]、同じく Amir Najm-i Sāni のバー・ワラーン・ナフル遠征に^⑨ 随行した時 (一五二二年) にカルシに在ける大屠殺 (qatl-i 'amm) を未然に防ごうとした [Hābīb, 528]、^⑩ 他にもまた事実であり、その後のヘラートに言及する諸史料の中にも、Amir Gīyās al-Dīn はゆるぎない派等待を裏付けるような記述は、何一つ見出すことができない。由らの師であるシャイフル・イスマーム Mawlāna Sayf al-Dīn が教友達に対する呪いを容認しようとした如く、彼が住民の代表者・保護者として、サファヴィー朝側に柔軟な対応を示したであらうことは想像に難くない。Amir Gīyās al-Dīn はサファヴィー朝治下のヘラートに在りて、「シーア派の諸問題 (masā'il-i madhab-i shī'a) を学んでゐる」人物に対し次のように言つたところ。

「^⑪ 我々がこの世に在りて居るは、宗派の悲しき (gam-i madhab wa millat) を味わひ、^⑫ 宗教の最も重要な事 (ahamm muhim-mat-i din) の一に在りて居る」 [Badā'i, 318-319]

一五二三年シャイヌーン朝の Timūr Sulṭān (Saybānī Hān の皇子) は、この年、Amir Gīyās al-Dīn に対して殺意を抱き [Hābīb, 536]、^⑬ また、逆だサファヴィー朝のクラーンの統治者 Amir Hān Mawṣillū は、^⑭ シャーの寵厚きこの人物を妬み、一五二二年、謀殺するに至つたのである [Hābīb, 582-583]。

ヘラートの有力者達の中で、特に重要な位置を占めていたと思われる三人について考察してきたが、他の有力者達についても興味深い動向を跡付けることができる。

Amir Jamāl al-Dīn 'Aṭā' Allāh al-Husaynī (表II—③)

シーラーズのサイイドの家系に属するこの人物は、伝承学に秀でた自身のおじと同じく、「伝承学をホラーサーンで彼ほどによく知っている者は他にはなかつた」と伝えられる〔*Babur*, 178b〕。高名な伝承学者で、数年マドラーサとハーンカーで教育(dars wa ifāda)に従事し、週に一度、ホラーートの金曜キヌマで有力者達(ʿaṣraf wa akābir)を教導(irsād wa naṣiḥat)してゐたところ〔*Hātib*, 359〕。せよらへ、チヤムール朝時代からこの有名な職務を有してゐたものと思われる。Hwāndamirがこの Amir Jamāl al-Dīn の略伝を記してゐた時(一五二二—二三年)^②、彼は既に隱遁し、息子がその後任(qā'im-maqām)として教育(dars wa ifāda)に従事してゐたが、Amir Jamāl al-Dīn 自身もホラーートに留まつてゐた様子で、当時の王達(salāṭin)や統治者達(hukkām)は「かの狼下の所な伺候(ḥāḥim)と(mulāzamat)が志の保護(dimma-yi himmat)に必要である」と知つてゐたところ〔*Hātib*, 359〕。隱遁の時期は不明であるが、Saybānī Ḥān 及び Sāh Ismā'īl のホラーート占領に關わりなへ、Amir Jamāl al-Dīn とその家系はホラーートにおいて高い地位を保持し続けたと見做すことが出来る。Sāh Ismā'īl のホラーート占領時、ソハンに於いて「二二人のイヤーム達の輝かしい行為」を語ったのが、他ならぬこの Amir Jamāl al-Dīn である〔*Hātib*, 515〕。彼が Ḥafīz Zayn al-Dīn の如き厳格なスンナ派の立場を取らなかつたことは明らかである、實際に、前述の Amir Ġiyās al-Dīn と同じく後代のシーマ派教徒列伝に取り上げられてゐる〔*Mu'minin*, 527-529〕。

Amir Nizām al-Dīn 'Abd al-Qādir (al-) Maṣṣadī (表II—④)

この人物は、Sultān Husayn Mirzā の時代に長年マドラーサで教育(ifāda)に従事し、長い間ナキーン^③の地位とホラーサーン地方(mamlakat)のカーヂヤー職が与えられてゐたところ〔*Hātib*, 354〕。次いで、Saybānī Ḥān のホラーート占領後、ナキーンとホラーサーン諸地方(mamalik)の大カーヂヤー(aqāḍ al-quḍat)の地位が与えられる〔*Hātib*, 382〕。ところが、Sāh Ismā'īl のホラーート占領後、この Amir Nizām al-Dīn が如何なる役職を保持したのか全く確認できなくなり、Abū

al-Qāsim Bāḡsi の乱(一五二三年)におきて、彼は反サフマヴィー朝の立場を取ることになる。この内乱は、ヘラートを一時(一三か月)占領してついでシャイバーン朝の Timur Sultān がバー・ワラーン・ナフルに退却した後、Timur Sultān の下で「副官の位(martaba-yi niyābat)」に就いた Abū al-Qāsim Bāḡsi とする人物が、接近しつつあるサフマヴィー朝軍からヘラートを守らんとして親サフマヴィー朝の有力者達と対立し、逆に約二千の急募兵を率いてヘラートを攻撃する [Habib, 536-537] として記述されている。この時 Amir Nizām al-Din ḡ Abū al-Qāsim Bāḡsi を支援(hawādār)し、その軍に合流したと云ふ [Habib, 537]。最終的に、この内乱はサフマヴィー朝の軍勢力によって制圧され、Amir Nizām al-Din は逃走した [Habib, 538]。これ以降、この人物の動向は明らかではなく、歿年(一五一九年)だけが伝えられている [Habib, 354]。

Ḥwāja Jamāl al-Din ‘Atā’ Allāh (表II-③)

前述の Abū al-Qāsim Bāḡsi の乱にまつて Šāh Ismā‘īl の好意(dawlatwāh)を明らかにし、親サフマヴィー朝の立場を取った有力者の一人がこの人物でもある [Habib, 537]。表II-①~③の有力者達の中で、この Ḥwāja Jamāl al-Din だけが所謂ウラマーに属する。彼は Sultān Ḥusayn Mirzā の治世半ばにワズィールとなり、次いで「ディーワーン監督官の地位(maṅsab-i isrāf-i dirān)」を御、Sultān Ḥusayn Mirzā の晩年には、更に「勅書官の地位(maṅsab-i risālat wa parwana)」を兼ねて持ったと云ふ [Habib, 332]。されど、Ḥwāja Jamāl al-Din は、「信仰の厚い人物」[Babur, 177a] で、「国務と財務の重要事(mahamm-i mulk wa mal)におけるこのような職務に従事していたにも拘らず、義務的あるいは自発的な宗教の務めを片時も怠ったり軽んじたりしなかった」[Habib, 332]。Sultān Ḥusayn Mirzā 歿後は如何なる君主に対しても仕官することを固辞したが、「ヘラートのアミール達とワズィール達は、如何なる重要事も、かの閣下の理解と承認なしには何一つ決定しなかった」という [Habib, 332]。君主との結び付きが強く政争の影響を受け易い高級官僚の経歴を持つものの、「宗教の務め」に熱心で世俗の官職に執着しなかったこの人物に対し、周囲の信頼は厚かつ

たほうである。Hwāja Jamāl al-Dīn は、自らの死(一五二二年)に先立って、サファヴィー朝のヘラートの統治者 Amir Hān Mawṣillū ḡyē のフニール達や副官達(nuwāb)の各々に自身の財産(jihat wa mutamalikat)の一部を譲渡するよう定めたところ〔*Habit*, 333〕。Abū al-Qāsim Balṣī の乱後も、彼はサファヴィー朝側に好意的であり続けたと思われる、良好な関係が想定される。

Amir Sadr al-Dīn Yūnus al-Husaynī (表1—⑥)

この人物は、ヘラートの著名なサイイドの家系に属し、ティムール朝時代、長年三つのマドラサで教育(ḥidāb)に従事していた〔*Habit*, 352〕。Saybānī Hān のヘラート占領後は、「単独で」ホラーサーン地方(dīyān)のムフタスィブ(市場監督官)となる〔*Habit*, 352, 382〕が、一―二年ほどの地位から退き、シャイバーン朝のバルフの統治者の要請によりヘラートを離れて、今度はバルフのシャイフル・イスラーームの地位に就いた〔*Habit*, 352〕。ところが、サファヴィー朝の Dīw Sultān Rūmlū がバルフの統治者となった時(一五一三年)、幾人かの「悪しき者達(al-i-sarāra)』の中傷によって息子と共に処刑されたところ〔*Habit*, 352〕。Amir Sadr al-Dīn は、シャイバーン朝時代既にヘラートの主要な有力者とは呼ばなくなっているが、この人物個人の生涯に注目するならば、ティムール朝とシャイバーン朝の下で保持し得た高い地位と榮譽を、サファヴィー朝の下で自らの生命と共に失ったと言えよう。一五二一年バルフがサファヴィー朝の版図に加えられた〔*Habit*, 519〕時、Qiwām al-Dīn Husayn という名のイスファハーンのサイイドがバルフに派遣され、「その地方(hitta)のシャリーフの重要事(mahamm-i-sarīya)をイマーム派の気高き宗教(millat-i-‘alya-yi imāmiya)に適うよう定めた」ところ〔*Habit*, 608〕。しかし、このころが直接 Amir Sadr al-Dīn の立場に影響を与えたわけではなかった。Dīw Sultān Rūmlū がバルフの統治者となったのは、シャイバーン朝に一旦バルフを奪回された後のことであつた。この時バルフの有力者達(‘asraf wa alyān)は、先にウズベク軍に服従したことと懲罰を受けるのではないかと恐れていた〔*Habit*, 539-540〕のである。それらへ Amir Sadr al-Dīn の処刑は、ウズベク軍に対する服従の罪を問うたものであつた。

Qadi Sadr al-Din Muhammad al-Imami (表II-⑦)

カーディー職を「世襲の地位 (mansab-i mawrisi)」とする家系に属すこの人物は、カーディーであった父の歿（一四八六年）後、その地位とソルガルや免稅地 (mu'atayat) を相続した〔*Habit*, 335-336〕。Saybani Khan のヘラート占領後も、「従来通り」引き続き「カーディーに任じられた」〔*Habit*, 336, 382〕。そして、Sah Ismail のヘラート占領後には、シャイフル・イスラームの地位が与えられたと云ふ〔*Habit*, 336〕。この Qadi Sadr al-Din が、処刑されたシャイフル・イスラーム Mawlana Sayf al-Din の後任となったのである。新しいシャイフル・イスラームがヘラートの名門カーディー家から選ばれたことは、至極穩当に思えるが、この新任シャイフル・イスラームは、二―三年でその地位から退いてしまった〔*Habit*, 336〕。もっとも、退任の際に彼が詠んだ詩は、

地位 (mansab) より無位 (bi-mansabi) へと向かう／＼如何なる地位にも無位は勝る

と云うものであり、その後もヘラートに居住して、様々な人々から信頼され親しまれていたという〔*Habit*, 336〕。Qadi Sadr al-Din のシャイフル・イスラーム退任の背景に、サファヴィー朝側の圧力は感じ取れない。

Amir Razi al-Din 'Abd al-Awwal al-Husayni (表II-⑧)

先述の Amir Sadr al-Din (表II-⑥) の甥であり、著名なティムール朝の年代記作家 Mawlana 'Abd al-Razzaq Samarqandi の外孫にも当るこの人物は、若くして二つのマドラサのムダッリス（マドラサの教授）となり、一五二一年、四三歳で歿したと云ふ〔*Habit*, 355〕。Amir Razi al-Din がムダッリスとなったのはティムール朝時代のことであると思われる、シャイバーン朝とサファヴィー朝の各支配時代を通じての彼の動向は不明であるが、ヘラートを離れたという形跡は認められない。

以上の考察から明らかなように、ヘラートの主要な有力者達の動向には、シャイバーン朝時代ではなく、サファヴィー

朝時代において著しい変化が見出される(表Ⅱ-①、③、⑥の人々)。シャイバーン朝の支配は有力者達の地位や存在を脅かすようなものではなかったようで、彼らは、殆どティムール朝時代と変わらず高い地位を保持し得た。既に第一章で見たように、ヘラートの有力者達が無抵抗に支配を受け入れたという点ではサファヴィー朝の場合も全く同様で、彼らが敢えてシーア主義を拒まなかったにも拘らず、サファヴィー朝側が示した対応は假借のないものであり、中でも、彼らの筆頭に位置付けられるシャイフル・イスラーム Mawlānā Sayf al-Dīn と Qādī Iḥyār al-Dīn が、前者は処刑され、後者は財産を強奪されてヘラートを離れたのである。逆に、サファヴィー朝時代に軍事面での権力まで握った Amir Gīyas al-Dīn の如き存在も確認された。それでは、シャイバーン朝とサファヴィー朝がヘラートの主要な有力者達に示したこのような対応は、如何なる人々の意図に由来するのであろうか。

シャイバーン朝の場合、シャイフル・イスラームの任命は Saybani Ḥan の指示によるもので、ナキープ、カーディー、ムフタスイブ、ムダッリス等を任命したのは先述の貪欲なサドル Mawlānā 'Abd al-Raḥīm Turkistāni による(『*Ḥabīb*, 382』)。一方、サファヴィー朝の場合は、シャイフル・イスラームの処刑は狂信的なサドル Sayyid Sarif al-Dīn 'Alī によるものであり、Qādī Iḥyār al-Dīn の財産を強奪したのはキズィル・ムンシ達であった。また、『*Futūḥāt-i Sāhi*』によれば、Sāh Ismā'īl のヘラート占領時「イラクの統治者達 (ḥukkām) はホラーサーンの人々の諸家系の実質を知らなかったたので、ソニルガルの分量の決定とそれらの地位の区別は Sayf al-Dīn Ḥwāja Muzaffar (第一章註⑧) の公正な意見に依存した」という。^⑨「有力者達の慰撫とアドブ・マナーフ一族の榮譽ある宗教の強化」のためシャーに先んじてヘラートを訪れた(既述)ワズィール Ḥwāja Muzaffar Bitikī の存在も無視できないのである。これらの者達の間には、あるいはこれらの者達と Sāh Ismā'īl やその実権の代行者 Amir Najm-i Sāni (第一章註⑨) の間で、共通する意図があったとは考え難い。例えば、シャイフル・イスラーム Mawlānā Sayf al-Dīn の死はサドル Sayyid Sarif al-Dīn 'Alī の失脚の原因になり得たが、一旦はヘラートの名門カーディー家に与えられたシャイフル・イスラームの地位に、やがてアラ

ブのシーア派ウラマーが進出して来ることもまた事実なのである。

- ① このような著述は、多くの場合名門の家系に属したと思われるが、イスファハーンの名家については、既に幾つかの研究がある[R. Quiring-Zoche, *Isfahan im 15. und 16. Jahrhundert*, Freiburg, 1980, 210-253; 羽田 一九八七]。また、情況は異なるが、バー・ワラーン・ナフルにおいてナクシュバンディー教団の長 Hwaja Ahrar が果たした役割は、大いに参考になる[川本正知「ホーシャ・アフラルとアフー・サイード——ティムール朝における聖者と支配者——」『西南アジア研究』二五(一九八〇)]。
- ② 『*Habib*』刊本では、二番目に挙げられている人物の名が Amir Kamāl al-Din 'Atā' Allāh al-Husayni となっている(*Habib*, 377) が、一二七一年のテヘラン版では、表Ⅱで示したように Amir Jamāl al-Din 'Atā' Allāh al-Husayni である(III, 310)。
- ③ ティムール朝時代のシャイフル・イスラームは、サドル(第一章註⑧)の管轄下になく、他のウラマーとは別格の存在であった[Roemer, *op. cit.*, 157; 間野 一九六九, 三二二]。
- ④ この人物については、『三稿富治男「オスマン・トルコ初期に於けるアナトリアとマワラン・ナフルの学術交流」』『史学』三三—二(一九五九)、一四にも簡単な紹介が見える。
- ⑤ シャーフナーイー派に属した(*Barur*, 179b)この人物の弟子(*shāgird*)として、表Ⅱ④の人物をはじめ二五人の学者(*dānismānd*)が挙げられるとしよう[*Rasā'id*, 127b; *Rasā'id*/S, 351]。
- ⑥ シーラーズ出身で、一五〇九年サフマウイー朝の初代ワキールによりサドル職を与えられた[*Yahbin* 1959, 67, 69]。
- ⑦ *Yahbin* 1984, 18.
- ⑧ Mirzā Haydar ḡā'ib の著書の中で自身の従兄弟とあり保護者として

あった *Barur* に言及する時、常に敬意を込めた表現を用いるが、サフマウイー朝の援助を受けたサマルカンド再征服時(一五二一年)のシーア主義採用については批判的であり[*Cenemos* 1954b, 124]、*Barur* の援助に赴いた Amir Najim al-Sani 軍に対するウズベク軍の勝利を称えて『*Cenemos* 1954b, 135』。また、ヘラートの金曜モスクにおける Hāfiz Zayn al-Din 殉教についても、死を覚悟した彼が「教友連(*aṣṭāb*)の名を古くからの慣行通りに讀美と榮譽と共に読み始めた」こととその原因があるとして[*Rasā'id*, 160b; *Rasā'id*/E, 235]かなり意図的だ、勇敢で厳格なスンナ派教徒の殉教として描いている。

⑨ E. Glassen ḡā'ib の『*Mur'mini'n*』の記述を紹介してはいるが、結局『*Rasā'id*』に従ってシャイフル・イスラームの死を厳格なスンナ派教徒の殉教と見做している[*Glassen* 1972, 264]。

⑩ このシャイフル・イスラームは、一五〇五年一〇月二五日付でオスマン朝の Sultan Bayazid 二世宛に書簡を送っている。一五〇七年七〜八月付の Sultan Bayazid 二世の返信の存在も確認できる[*ʿErtdin Bey, Munṣarraf-i Salāṭin*, I, Istanbul, 1274, 364-366]。この書簡交換は、ヘラートでムタリリスとなっていたルーム出身のウラマーの帰国に関するものに過ぎなかったが、「誹謗」の要因には成り得たかもしれない。

- ⑪ この部分は訳者 Hakim Saib Muhammad Qazwini による加筆。
- ⑫ サフマウイー朝におけるサドルは、明らかになティムール朝やタタール朝の制度を受け継いだものであるが、サフマウイー朝創設期では、その権限は元来の職務に適わなかったとされている[*ʿArjomand, op. cit.*, 123-124, 310]。
- ⑬ 他は *Qāṭ* Iḥūyār; Sayyid Iḥūyār; Sayyid Iḥūyār al-Din

Hasan などの呼称を持つ。

① Aubin 1984, note 205.

② 他に Amir Muhammad-i Amir Yūsuf; Mir Muhammad-i Yūsuf; Muhammad-i Mir Yūsuf などの呼称を持つ。R. M. Savory は、カニヤール朝初期の地方統治に関連して、この人物にかなり詳しく言及している [R. M. Savory, "Some Notes on the Provincial Administration of the Early Safawid Empire," *BSOAS*, XXVII-1 (1964), 124-126]。

③ この時の情況については、岡野英一「ペーブルとヘラート」『オリエント』三三—二(一九八〇)を詳し。

④ シヤイブル・イスマラーム Mawlanā Sayf al-Dīn は、「七〇歳近くまで集団社葬に欠席することになった」と言われている [Bābur, 177b]。* Sāh Ismā'īl の「ローマ占領時」は、既に八〇歳前後に達している [Rasīdī, 161a; Rasīdī/E, 236]。彼が代役を必要とした理由はこのような高齢にあると思われる。また、タフターサーニー家が「風をなご」 Amir Gīyās al-Dīn が代役を選ばれたのは、Mawlanā Sayf al-Dīn の死後タフターサーニー家が絶えてしまったと伝えられる [Bābur, 177b]。彼の息子の存在が諸史料から確認できないこと、無関係ではないかと。

⑤ *Futūḥat-i Šāh* には、前法の Qādī Ḥuṭayr al-Dīn (カニヤール派) の後任になつたことが述べられている [Aubin 1984, note 205]。

⑥ Amir Gīyās al-Dīn の後任のカーブヤーが任命されたのは、その最後のころであり [Habīb, 534]。それまで彼はカーディーとサドルの地位を合わせて持つていたことになる。

⑦ 軍隊の指揮官の地位を表す「アミール」と、この Amir Gīyās al-Dīn をはじめ表し②、③、④、⑤の人物(全てサイド)に見られる敬称としての「アミール」は区別して考えなければならぬ。

⑧ この時の情況については、Cecenoz 1954b, 131-138 を詳しく参照せよ。

⑨ 他に Amir Jamāl al-Dīn; Amir Jamāl al-Dīn 'Alā' Allāh al-Muhaddis al-Dastakī al-Sīrāzī などの呼称を持つ。

⑩ Īwāndamīr は、Amir Jamāl al-Dīn の略伝の前の部分で「現年代、即ち九二九年」と記し [Habīb, 345-346]。後の部分では「年代は、ユンヌス暦九二九年に属する最近まで」と記している [Habīb, 383]。

⑪ ナイムール朝時代のナイキームは、サハヤンの中から選ばれ、サハヤン間の序列確定をその任務とする [Roemer, *op. cit.*, 149; 岡野 一九六九 三一一]。

⑫ Sulṭān Husayn Mirzā 時代の「ユンヌスのナイムール達 (umarā-i baḡsi) の一人は、ナイムール朝政権崩壊後は Saybānī Hān に厚遇された」とある [Habīb, 536]。ナイムール朝時代のユンヌスは「軍務のナイムールン (dīwān-i tuwāḡi)」に所属するトルコ人書記のユンヌス [Roemer, *op. cit.*, 170; 岡野 一九六九 三〇九]。

⑬ 単に Īwāja 'Alā' Allāh; Īwāja 'Alā' とも呼ばれている。

⑭ 具体的な職務内容は明確ではないが、この人物は、「ワズワール職の座 (masad-i wizāra) を踏み越えて、ナイムール監督官の地位の手綱を手」ある期間、「ユンヌス達とマスワール達の中で検査済 (iḥfāla 'alay-hi) の由を述べ報告 (awqā) した」とある [Habīb, 332]。

⑮ Īwāndamīr は、ナイムール朝の王親 (salāḥin-i Timūrī) の時代には、王権の中核の榮譽ある地位 (jalāli mansab-i sarkar-i salānat) の一に属していた [Habīb, 326]。

⑯ 別の二人の息子は、その後もサファウィー朝治下のヘラートで修学しつづき [Habīb, 352]。家系自体が絶えられたわけではない。

⑰ Īwājaḡi Qādī とも呼ばれていた。

- ⑭ Aubin 1984, 17. 引用部はフランス語からの重訳。
- ⑮ ホラーサーンの統治権を領有権 (yalat wa darāʾ) が Amir Najm-i Sani に与えられたことを示す Sah Ismaʿil の勅令 (farman) が現存する (Aubin 1984, 20)。
- ⑯ Aubin 1984, 18.
- ⑰ 一五二二／二三年 Sayb Zayn al-Din 'Alī が (ネーネ) に任じられ、ヤイフル・イスラームと大カーデーヤー (aqda al-quḍā) に任じられ

おわりに

一六世紀初頭のヘラートに相次いで現れた二つの新興王朝、シャイバーン朝とサファヴィー朝の支配は、明らかに性質の異なるものであった。前者は大都市ヘラートの富を貪欲に吸収しながらも、住民の中で指導者的立場にある主要な有力者達には穏便に対処した。シャイバーン朝内部の人々は、何よりもまず、新たに得た経済的基盤を十分に活用することに専心していたと思われる。一方、後者は、住民を王政から解放しながらも、宗教の問題によって混乱させ、主要な有力者達の地位や動向にも大きな影響を及ぼした。しかし、サファヴィー朝側がヘラートの主要な有力者達に示した対応について、何らかの定まった方針を見出すことは困難である。この事態に関わったサファヴィー朝内部の人々は多様であり、各々の意図や権限が錯綜していると思われるのである。本稿では正面から扱わなかったサファヴィー朝シリア主義の意義について、ここで敢えて推論を加えることが許されるならば、このようなサファヴィー朝内部の人々が、自らの願望を正当化し実現するために何らかの口実を必要とした時、サファヴィー朝シリア主義がそのひとつの有効な手段となったと言えるのではなからうか。

本稿における考察から明らかなように、シャイバーン朝及びサファヴィー朝のヘラート支配の在り方は、君主とそれに率いられる兵士達、つまり「トルコ系遊牧軍事集団」によってのみ規定されるものではない。シャイバーン朝のヘラート

約三年その地位にあった (Habibi, 610) が、この人物は、シャハル・フーシル出身の高名なシリア派学者である (Arjomand, *op. cit.*, 302; Glassen 1972, 265)。また、同じくシャハル・フーシル出身で Sayb Zayn al-Din 'Alī の弟子 'Abd al-Samad とする人物が、後述 (ネーネ) のシャイフル・イスラームに任じられた (Skandar Beg Muniri, *Tarīkh-i 'Ālam-āra-yi 'Abbāsi*, ed. Iraj Afšār, I, Tehran, 1350, 155-156)。

支配は、サドルや宮廷詩人による収奪によって、更にその特色を明らかにし、サファヴィー朝の場合も、サドルやワズィールの意図と権限を無視することはできない。また、ヘラート住民内部に目を向けると、政權交代時に支配集団に対する住民全体の立場を決定し得たのは、ごく一握りの有力者達である。こういった、定住民社会の出身で宮廷内に地位を確立していた文官達や、地域社会の有力者達の、経歴や動向が他の主要諸都市の事例の中でも提示され、「トルコ系遊牧軍事集団」の動きとの関連においてとらえられるならば、一六世紀初頭の東方イスラーム世界の変動を正しく理解できるだけでなく、シャイバーン朝とサファヴィー朝の、王朝史の起点をも、より明確に示し得るであろう。そして、このような試みは、あまりにも不明な点の多いシャイバーン朝創設期のマー・ワラーン・ナフルにおいて、急務であると言えよう。

(京都大学大学院生)

Herat in the Early Sixteenth Century
—Under the Reign of Two Rising Dynasties—

by

Kazuyuki Kubo

In the early sixteenth century, the Shaybānid dynasty and the Şafawid dynasty in turn governed one of the biggest cities in the Eastern Islamic World, Herat. It is thought that both dynasties had a similar organization at the beginning. But an analysis of two questions: how each dynasty began to control Herat, and how Herat's main notables coped with each, shows that there was much difference between the two. The Shaybānid dynasty devoted itself to increasing its wealth, and so, oppressed Herat's population. On the other hand, the Şafawid dynasty caused religious problems, and had important effects on the status and behavior of the main notables in Herat. But it had no unified policy toward them. The common feature of both dynasties was that Iranian officials within the court played an important role.